

新潟・北小脇遺跡

の遺構からは、珠洲焼・青磁・土錘・木製品（人形・箸状木製品・漆器など）・砥石・刀子・羽口・鉄滓（楕形滓・粒状滓）・鍛造剝片などが出土した。



(弥彦)

北小脇遺跡は、米納津集落の南西端の水田中に位置する。国営大通川放水路の建設に伴い、約一五〇〇〇m²を調査した。

検出遺構は、平安時代の溝・土坑・ピット、中世の溝・土坑・井戸・掘立柱建物・道路状遺構・鍛冶関連遺構である。出土遺物は、平安時代の遺構・包含層から須恵器（杯・杯蓋・甕・壺・円面硯）・土師器（杯・甕・黑色土器（杯）、中世の木簡も同時期とみられる。

北小脇遺跡は、米納津集落の南西端の水田中に位置する。国営大通川放水路の建設に伴い、約一五〇〇〇m²を調査した。

検出遺構は、平安時代の

木簡が出土した遺構は中世の井戸跡で、SE二〇、SE二一、SE四三である。SE二〇は、径一二八cm深さ一二五cm（検出面より、以下同様）を測る。ほぼ垂直に掘られた素掘りの井戸である。木簡二点のほか、共伴遺物として、珠洲焼・かわらけ・砥石・羽口・木製品が出土した。SE二一は径二四〇cm深さ一七五cmを測り、やや楕円の平面プランを呈する。ほぼ垂直に掘られた素掘りの井戸であるが、中段より下が若干外側に広がりややフラスコ状を呈している。

木簡二点のほか、共伴遺物は木製品が主体で下駄や刀形など、また箸状木製品が一〇〇点近く出土した。SE四三は径一八〇cm深さ一五八cmを測り、SE二一と同様にやや楕円形を呈する。上端から下端まで完全に垂直に掘られた素掘りの井戸である。木簡二点のほか、箸状木製品や鉄滓などが出土した。いずれの木簡も井戸中段より下段にかけての黒灰色土からその他の遺物とともに検出された。覆土の状況からほかの遺物とともに投棄されたものと考えられる。

井戸の廃絶時期を特定する遺物の出土が少ないため断定できない

が、遺跡全体を通して出土している珠洲焼から判断すると、一四世紀から一五世紀を中心とするころに営まれていた集落と考えられ、木簡も同時期とみられる。

〇三二〇

(1) 正和元年

(82)×19×5 081

〇三二一

(2) 「賀曆式年カ」
・□□□□

・□ □

(3) 「(符籙) □ □」

(118)×16×4 059

263×31×7 051

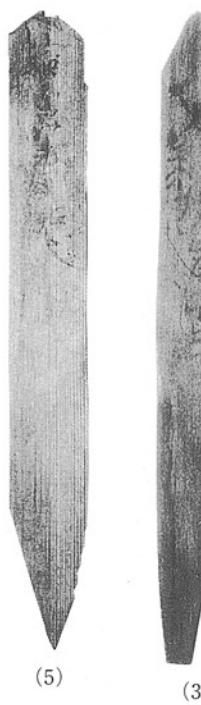
〇三二二

(4) □将来子孫】

(168)×12×3 059

(5) 蘇□将来子孫也】

(236)×28×2 051



(1)は、上端が斜めに切られ、先端が炭化しており焼かれたものと思われる。また下端は欠損している。鎌倉時代の正和元年（一一二一）と判断される。なお、この他にも木簡一点が出土しているが、梵字が墨書きされており判読できなかった。

(2)は、上端は折損しているが、下端は鋭く尖らせる。両面に墨書きされている。表面冒頭は「賀曆式年」と判読できる可能性がある。

る。「賀曆」を元号の「嘉曆」の当て字と判断すると、鎌倉時代の嘉曆二年（一一二二）にあたるが年号と読めるかどうか確実でない。裏面の墨書きは判読不能であるが、呪文の類と推測される。(3)は、上端を鋭く尖らせ、下端も尖らせてはいるものの平坦面を作り出している。上半に符籙があり、呪符木簡と考えられる。なお、この他にも上端を山形に尖らせ、下端を鋭く尖らせた木簡状木製品が一点出土しているが、墨書き及び墨痕を確認することができなかつた。

(4)は、上端は欠損しているが、下端は鋭く尖らせている。(5)は、上端をわずかに欠損するが、両端ともに鋭く尖らせる。(4)(5)とともに蘇民将来札である。
(布施智也)



(1)



(2)